

## 学 会 記 事

### 第29回徳島医学会賞及び第8回若手奨励賞受賞者紹介

徳島医学会賞は、医学研究の発展と奨励を目的として、第217回徳島医学会平成10年度夏期学術集会（平成10年8月31日、阿波観光ホテル）から設けられることとなり、初期臨床研修医を対象とした若手奨励賞は第238回徳島医学会平成20年度冬期学術集会（平成20年2月15日、長井記念ホール）から設けられることとなりました。徳島医学会賞は原則として年2回（夏期及び冬期）の学術集会での応募演題の中から最も優れた研究に対して各回ごとに大学関係者から1名、医師会関係者から1名に贈られ、若手奨励賞は原則として応募演題の中から最も優れた研究に対して2名に贈られます。

第29回徳島医学会賞は次の2名の方々の受賞が決定し、第8回若手奨励賞は次の3名の方々に決定いたしました。受賞者の方々には第246回徳島医学会学術集会（夏期）授与式にて賞状並びに副賞（賞金及び記念品）が授与されます。

尚、受賞論文は本号に掲載しております。

#### 徳島医学会賞

（大学関係者）



氏 名：越智ありさ  
生 年 月 日：昭和62年7月28日  
出 身 大 学：徳島大学医学部栄養学科  
所 属：徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部生体栄養学分野

研 究 内 容：筋萎縮のメカニズム解明と、筋萎縮阻害薬の開発

受賞にあたり：

この度は、第29回徳島医学会賞に選考していただき、誠にありがとうございました。選考委員の先生方ならびに関係各位の皆様へ深く感謝申し上げます。

わが国は超高齢化社会を迎え、25年後には国民全体の

約3分の1が高齢者になると予測されるほどの、世界一の高齢者大国となっております。それに伴い、高齢者を含む寝たきり患者数は増加の一途を辿っており、医療費の圧迫や介護問題など、大きな社会問題となっております。

現在私は、徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部生体栄養学分野にて、筋萎縮の予防・治療法の開発を目指し研究を行っております。今回の発表では、当研究室で解明した Unloading（寝たきりや無重力）環境における筋萎縮のメカニズムと、それを阻害するペプチド Cblin について報告させて頂きました。さらなる研究により、Cblin を基にしたユビキチンリガーゼ阻害による筋萎縮阻害剤が開発されれば、世界初の治療薬となり、寝たきりで苦しむ患者の QOL の向上や宇宙飛行士の有意義な宇宙滞在のサポートに貢献できると思います、今後もその実現に向け研究を続けていく心構えです。

最後になりましたが、日頃より御指導、御鞭撻を頂いております二川健先生はじめ、諸先生方ならびに同講座の皆様へ心から感謝申し上げます。また、ペプチドの修飾を行うにあたりまして多くの御助言、御協力を賜りました同研究部機能分子合成薬学分野の根本尚夫先生にこの場をお借りし厚く御礼申し上げます。

#### （医師会関係者）



氏 名：島 健二  
生 年 月 日：昭和9年2月2日  
出 身 大 学：大阪大学医学部  
所 属：川島病院

研 究 内 容：徳島県医師会糖尿病対策班（第1次、第2次）活動の成果

受賞にあたり：

この度は第29回徳島医学会賞に選考くださり、有難うございました。選考委員会の諸氏はじめ、関係各位に感謝いたします。

徳島県は平成5年より連続して（平成19年を除く）糖尿病死亡率全国1位の不名誉な状態にあります。平成16年徳島県医師会は、この状態からの脱却を目指して、糖

尿病対策班を立ち上げ糖尿病予防活動を開始しました。本対策班は医師、歯科医師、栄養士、保健師などの医療従事者のみでなく行政官をも含んだ構成員から構成され、従って、その活動は広域で包括的なものになりました。

一般住民を対象にした糖尿病対策活動は色々な組織、地域において実施されていますが、その活動の成果は必ずしも明らかではありません。本研究の目的は、平成16～21年、6年間の本対策班の活動の成果を県民健康栄養調査、国民健康栄養調査をもとに評価することにあります。県民健康栄養調査は平成9年、15年、22年に実施され、そのうち平成9年、15年の成績の比較で本対策班活動開始前6年間の、また、平成15年と22年の成績の比較で活動開始後6年間の糖尿病関連データの変化から対策班活動の有用性を評価しました。さらに、ほぼ同時期に実施された国民健康栄養調査成績から全国的な状況の推移を求め、県民健康栄養調査成績の推移と比較しました。

対策事業は6年間継続的に展開しましたが、前半平成16～18年度第1次と後半平成19～21年度第2次で活動の力点がやや異なりました。第1次対策班事業は短期的対策と称せられるべきもので、県民に対する啓蒙活動にその力点が置かれました。第2次対策班事業は実際に行動に移すことに力点が置かれ、中でも特に班員の属する職種が連携して有機的に事業を展開することを目指しました。

県民健康栄養調査、国民健康栄養調査成績を比較して次のようなことが明らかになりました。平成9、15年の対比：耐糖能障害者（19.5%→25.3%）、肥満者の割合（28.7%→31%）の増加。平均歩数の有意な減少（6838→6228）。平成15、22年の対比：耐糖能障害者の割合の減少（25.3%→23.6%）（全国では有意な増加：23.0%→27.0%）、肥満者の割合の減少（31.0%→27.1%）、平均歩数不変（6228→6210）（全国では著減：7103→6426）。平均総エネルギー摂取量の有意な減少（1927→1856）。健診等の受診率の有意な増加（43.4%→61.6%）などです。

活動前6年間では糖尿病関連指標の多くが増悪しましたが、6年間の活動後は改善あるいは増悪が抑制され、活動の有用性が検証されました。ただ、この成果は糖尿病対策班のみの活動によるものでなく、県下の諸組織が一丸となって実施してきた活動の結果によるものと思われ、この機会に、共に努力してきた関係各位に感謝する

とともに、今後も活動を継続されることを希望する次第です。

#### 若手奨励賞



氏 名：羽星辰哉  
生 年 月 日：昭和63年3月11日  
出 身 大 学：徳島大学医学部医学  
科  
所 属：徳島大学病院卒後臨  
床研修センター

研 究 内 容：くも膜下出血に続発した重症の Neurogenic stress cardiomyopathy の検討

受賞にあたり：

この度は徳島医学会第8回若手奨励賞に選考頂き誠にありがとうございます。選考して頂きました先生方、並びに関係者各位の皆様には深く感謝申し上げます。

くも膜下出血に Neurogenic stress cardiomyopathy (NSC) が続発することはよく知られていますが、その重症度はさまざまで、手術や予後に影響を与えるような高度心機能低下を呈する重症の場合もあり注意が必要です。高度心機能低下をきたした重症 NSC を見逃さないために、その発生頻度や危険因子等は重要であるため、今回、くも膜下出血に続発する重症 NSC についての検討を行いました。

当院での診療記録の後ろ向き解析により、重症 NSC は特に閉経後女性かつ重症のくも膜下出血例において高頻度に出現したという結果が得られました。私が脳神経外科研修中に経験した代表症例も、閉経後女性における重症のくも膜下出血でした。続発した重症 NSC に対して保存的加療を行い全身状態の改善を図った後に、くも膜下出血の晩期手術を施行し、その後の経過は良好でした。

今回の結果から、くも膜下出血後に血圧低下あるいは心電図異常を認めた場合は NSC を考慮し、心臓超音波検査により迅速に診断することが非常に重要であると感じました。

最後になりましたが、脳神経外科での研修期間終了後にも関わらず、本研究を行うにあたりご指導ご鞭撻を頂きました徳島大学脳神経外科学永廣教授、八木先生、多田先生、スタッフの皆様方には心より御礼申し上げます。

また日頃よりご指導・ご支援下さる卒後臨床研修センターの佐田先生、西先生、上田先生、渡部先生、梶浦先生、スタッフの皆様方にも心より御礼申し上げます。



氏 名：<sup>さかもとしんいち</sup>坂本晋一  
生 年 月 日：昭和62年 6 月17日  
出 身 大 学：徳島大学医学部医学  
科  
所 属：徳島大学病院卒後臨  
床研修センター

研 究 内 容：Erlotinib で induction therapy を行った  
Ⅲ A 期

非小細胞肺癌の 1 手術例

受賞にあたり：

この度は徳島医学会第 8 回若手奨励賞に選考頂き誠にありがとうございます。選考して頂きました先生方、並びに関係者各位の皆様方に深く感謝申し上げます。

現在、わが国における死因の第一位は悪性新生物であり、部位別にみると肺癌による死亡が近年では第一位となっております。早期肺癌の切除成績は、他の治療による成績よりも明らかに良好とされており、外科治療による病巣の完全切除が肺癌根治のため最も重要な治療手段とされています。しかしながら、肺癌の多くは根治困難な進行期の状態で発見されることが多いため、全身化学療法が重要な役割を果たしています。近年の飛躍的な分子生物学の発展に伴い、その成果が臨床にも取り入れられるようになってきました。われわれが術前化学療法として用いた Erlotinib (EGFR-TKI) もその一種であり、優れた臨床効果を期待することができます。本症例でも術前化学療法として Erlotinib を用いて高い縮小効果を得ることができ手術を施行することが可能となりました。また、Erlotinib による術後化学療法の効果を期待し現在も投与しております。

EGFR-TKI を術前導入療法、術後化学療法として使用するには依然課題が残されていますが今後新たに有用性の検証が期待され、本例のような症例の集積が今後必要であると痛感しました。

最後になりましたが、研修期間中にも関わらずこのような機会を与えてくださり、また非常に多くのご指導を

賜りました呼吸器外科、呼吸器・膠原病内科、環境病理の諸先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また、日頃より御支援くださる卒後臨床研修センターの佐田先生、西先生、梶浦先生、上田先生、渡辺先生、スタッフの皆様方に心より御礼申し上げます。



氏 名：<sup>まつもとかずひさ</sup>松本和久  
生 年 月 日：昭和60年 6 月19日  
出 身 大 学：徳島大学医学部医学  
科  
所 属：徳島大学病院卒後臨  
床研修センター

研 究 内 容：プロテイン C 活性低下を背景とし、オートマチック車への変更を契機に肺血栓  
栓症を発症したタクシー運転手の一例

受賞にあたり：

この度は徳島医学会第 8 回若手奨励賞に選考頂き誠に有難うございます。選考して下さいました先生方、並びに関係者各位の皆様方に深く感謝申し上げます。

深部静脈血栓症はエコノミークラス症候群として世間でも広く知られている疾患の 1 つですが、肺血栓栓症の合併により致命的になるケースもあり、その予防管理は極めて重要であります。深部静脈血栓症・肺血栓栓症の発症には血流のうっ滞が大きく関与しており、タクシー運転手やトラック運転手のような長距離ドライバーなどの職種で発症しやすいとされています。

今回の症例を通じて、産業衛生学的観点から、タクシー産業に限らず長時間座位姿勢を保持することを余儀なくされる職業においては、血栓易形成状態が背景にあるかどうかのスクリーニング検査や、勤務形態の見直し、定期的な医療機関の受診が求められるということを強く認識致しました。

最後になりましたが、研修期間中にこのような貴重な機会を与えて下さり、御指導頂きました徳島大学循環器内科学佐田教授、仁木先生、山口先生、スタッフの皆様方に心から御礼申し上げます。

また日頃より御指導・御支援頂いております卒後臨床研修センターの佐田先生、西先生、上田先生、梶浦先生、渡部先生、スタッフの皆様にも心から御礼申し上げます。